

狂言 『附子』

所用あって外出することになった主人は召使う二人の冠者に附子という猛毒の入った桶を預け、その方向から吹く風に当ってさえ死んでしまうので、絶対に桶には近付かないようにと言い置いて出かけます。

さて、近付くと言われればかえって気になるのが人間というもの。二人は風に当らぬよう扇で仰ぎながら桶の蓋を開け、恐る恐る中を覗き込みます。すると中には毒ではなく何やら美味そうなものが…。思いきって一口食べてみると、なんとそれは砂糖でした。二人は一口二口と食べるうちに止まらなくなり、とうとう砂糖を食べ尽してしまいます。

主人に叱られることを恐れた二人は言い訳を思案し、やがて主人秘蔵の掛け軸を破り、さらに天目茶碗まで割りはじめて…。

能 『高砂』

肥後国阿蘇（熊本県阿蘇市）の神主友成が都への船旅の途中、播磨国高砂（兵庫県高砂市）の浦へと着きます。

するとそこにさらえと杉箒を手にした老夫婦が現れ、由あり気な松の木陰を掃き清めます。老人はこの松こそ『古今和歌集』に「高砂住江（住吉）の松も相生のやうに覚え」とある高砂の松だと教え、自分たちも同じく高砂と摂津国住吉（大阪市住吉区）に離れて住む夫婦なのだと言います。

不審がる友成に、さらに老夫婦は遠く離れていても夫婦の心は通うもののだと言い、非情の草木である松でさえ相生（別の樹木が同じ根から生え、地中で繋がっていること）の名があるのだから、離れて住む夫婦がいても不思議はないのだと言います。

また高砂の松は『万葉集』が編まれた上代を、住吉の松は『古今集』が編まれた延喜の御代をそれぞれ指し、四季を通じて変わらぬ緑を湛える松のように、未久しく栄える御代を讃えているのだと夫婦は語ります。

やがて日が暮れ、入相の鐘が鳴ります。老夫婦は実は自分たちこそ高砂住江の相生の松の精なのだと言明し、住吉で待つと言いつつ残して小舟に乗り、消え失せてしまいます。

月の出とともに追って船出した友成が住江へと着くと、やがて住吉明神が現れ、春宵の月下に颯爽と舞を舞い、御代を祝福するのです…。

前半の清廉さと後半の力強く颯爽とした神舞が見所の、世阿弥作の名作祝言能です。

高砂の松を『万葉集』（古風）に、住江の松を『古今集』（新風）に例え、それらを相生とすることと歌道の繁栄を表したとする『古今集』仮名序の解釈によってこの曲が書かれたとも言われています。

また世阿弥の言葉を記した『申楽談儀』には、同じく世阿弥作の脇能『弓八幡』を「曲（趣向）もなく、真直成能也」とあるのに対し、この曲は「猶し鱧が有也」とあり、さらに趣向を凝らした曲であると自ら評しています。